



## 「目でみることば」 おかべたかし・文 山出高士・写真

只木 慧

Kei TADAKI

実をいうと、あまり頭を使わない本が好きである。だが仕事柄それも言っていられないから、純文学や古典も手に取り、普段読まない難しい本も読む。結果として難解な文章や複雑な言い回しに疲れ、本が嫌いという生徒の肩を持ちなくなる時がある。そういうときに手に取る本の一つが本書とそのシリーズである。

この本との出会いは、書店でのいわゆる「ジャケ買い」だ。風に吹かれたタコが

「どうも 私が『引っ張りだこ』です」

と言っている表紙に、思わず本書を手に取り、レジに向かった。繰り返しになるが頭を使わない本が好きなのだ。さらにそれが面白そうならもつといい。そしてこの本は両方を兼ね備えている。

写真集というのは、複雑な文章を追いたくなくときに手に取るに最適である。「言葉の由来」をテーマにした本書の構成は、言葉とその由来となったものの写真、そしてページをめくると語源解説と

関連写真などが並んでいる。読んでみるとただ写真がきれいというだけでなく、言葉の勉強をした気にもなれる。

例えば「蓼食う虫も好き好き」の語の右ページには、1ページまるごとで「蓼」の写真が載っている。蓼なんてことわざでしか目にしない言葉で、現物はおろか写真さえ見たこともなかったが、意外に普通のスーパーの山菜コーナーなどにでも平然と置いてありそうだ。柔らかそうな葉は、「好き好き」な味の植物には見えない。次ページをめくり由来を見ると、どうもこの蓼は辛いらしい。実は私は、蓼は苦いから「好き好き」なのだと誤解していた。これはいいことを知ったと続きを読むと、カメラマンがこの蓼の写真を撮るために現物を探した際には、スーパーなどを探してもなく、やっと築地市場で鮎用に売られているのを発見したとある。そして一般に流通しないからにはよほど辛くてまずいのかと思えば、撮影用に買った蓼で鮎蓼という料理を作ったところ美味だったと続く。そう書かれれば、人生で食べてみたいもののリストに鮎蓼が追加される。

難しい本は、手に取りにくいものだと思う。しかし、それを構成する言葉の由来一つ一つを見ていくと、新しい発見が多くて面白い。この写真集を読むと、難しい言葉の由来や原点に触れ、新しいことを知る面白さを再認識できる。そしてそれすら感じる気力がないときも、表紙写真のタコのような適度なジョークは、本を手取るハードルを少しは下げてくれると思う。ぜひ本が嫌いという生徒に、こんな本もあるのだと知ってほしい。

